

# 大学調理学実習室の食器に関する一考察

## —Made in Occupied Japan の食器をめぐって—

五 島 淑 子

An Examination of the dishes Held in the Cooking Room at University:  
On the Chinaware Made in Occupied Japan

GOTO Yoshiko

(Received September 24, 2010)

### 1 はじめに

食文化研究において、台所・食器・食卓は、重要な研究テーマのひとつである。しかしながら調理機器や調理用具、設備に関する研究は、余り多くはない。本稿は、大学の調理室に残された食器について報告し、大学における調理学実習の変遷を明らかにする一助としたい。

山口大学教育学部では、平成21年度から耐震強度補強のための改修工事が進められている。そのため、食物調理科学教室と呼んでいる調理学実習室も改修されることになった。引っ越し作業のときに食器棚で見つけたのが、Made in Occupied Japan の食器である。この食器を使用した調理実習の献立がどのようなものであったか、調理実習の内容の変遷は興味深い、その前提として、この食器自体について調査したことを報告する。方法として、2種類の食器の特徴及び由来を調査することと、山口大学教育学部の沿革を調査し、食器の保管について検討した。

### 2 Made in Occupied Japanの食器について

第2次世界大戦後、GHQ（連合国軍最高司令部）の統制下で、輸出向け製品に“Made in Occupied Japan”と表示することが義務付けられた。Made in Occupied Japanとは、占領下日本製の意味である。このMade in Occupied Japanの表示が使われたのは、輸出貿易が再開された1947年頃から、主権回復を果たす1952年までの約5年間である。陶器や玩具がよく知られており、コレクターの間では「Occupied Japanもの」「MIOJもの」などと呼ばれ、北米で人気が高いと言われている。

山口大学教育学部の調理学実習室に保管されていたMade in Occupied Japanの食器は、青色の皿と白色の皿の2種類があった。青色の皿は3つに仕切られたランチプレートで27枚あった（写真1～3）。裏面の中央にMade in Occupied Japanと描かれている。皿によっては、きれいに文字が読めるものもあるが、写りのよくないものもあった。一方、白いスープ皿は13枚あった（写真4～6）。裏印にMade in Occupied Japanの文字がある。



写真1 青い皿 (表面)



写真4 白い皿 (表面)



写真2 青い皿 (裏面)



写真5 白い皿 (裏面)



写真3 青い皿 裏印 (拡大)



写真6 白い皿 裏印 (拡大)

### 3 絵柄について

青い皿に描かれた模様は、ウィローパターンと呼ばれる絵柄である。この模様は、18世紀末にイギリスで案出されたもので、17、18世紀の中国ブーム、シノワズリーの産物と言われる。この模様は、中国が舞台の悲しい恋の物語である。話にはいくつかバリエーションがあり、『柳模様の世界史』（東田、2008）に詳しく記述されているが、簡単に説明すると以下のようなものである。

高級官吏の娘のクーン・セーと、高級官吏の秘書チャンが恋をしてしまう。高級官吏の父は二人の恋を認めるはずはない。自分の友人で、お金持ちの公爵に娘を嫁がせようとする。その結納の宴会に乗じて、チャンはクーン・セーを連れて逃げようとする。橋の上で、先頭がクーン・セー、次がチャン、最後の人物が父親である。なんとか逃げ延びた恋人たちは、とりあえずクーン・セーに仕えていた侍女の家、橋の向こうの小さな家に隠れ住む。ここにも追っ手がやってきて、逃げ延びた2人は、小さな島に住み着く。父親は島を攻撃し、2人は死んでしまい、2羽の鳥になる。そのようなストーリーである。

楼閣、向かい合う2羽の鳥、橋、舟に柳も描かれており、柳模様すなわちウィローパターンとよばれている。

### 4 食器の特徴

青い皿の重量を表1に示した。全部で27枚あり、重さは最も軽いもので770グラム、重いものが989グラム、平均すると902グラムの重い食器である。青色の皿の特徴をまとめると、①3つに仕切られたランチプレート ②ウィローパターンの絵柄 ③大きさは直径26センチ、高さ3センチ ④重量は、平均902グラム ⑤製造元は不明 ⑥硬質陶器 ⑦転写プリントは模様が切れている ⑧品質はよくない。

表1 青い皿の重量

直径26cm、高さ3cm			
No.	重さ (g)	No.	重さ (g)
1	816	15	967
2	989	16	898
3	957	17	951
4	952	18	938
5	951	19	856
6	966	20	853
7	839	21	911
8	965	22	810
9	867	23	868
10	903	24	896
11	832	25	943
12	961	26	868
13	934	27	890
14	770		
	平均		901.9
	標準偏差		58.2
	最小値		770
	最大値		989

表2 白い皿の重量

直径20.5cm、高さ3.5cm		
No.	重さ (g)	
1	320	
2	291	
3	294	
4	308	
5	267	
6	324	
7	272	
8	308	
9	269	
10	301	
11	339	
12	272	
13	284	
	平均	296.1
	標準偏差	23.1
	最小値	267
	最大値	339

一方、白い皿は、裏印から、東洋陶器、現在のTOTO製であることがわかる。現在のTOTOの沿革（田村・宮田編、2003）をみると、1904年（明治37）に日本陶器合名会社（愛知県愛知郡鷹場村大字則武）が創業される。そこから分離独立して、1917年に北九州市小倉に「東洋陶器株式会社」が設立され、衛生陶器の製造を開始し、翌年には食器類の製造を開始した。衛生陶器の製造販売を目的として創業した会社が食器も製造販売した理由は2つあり、1つ目は、創業当時の日本は下水道設備がまだほとんど普及していないため、衛生陶器だけで経営がなりたつとは到底考えられず、食器を扱うことで経営を軌道にのせようとしたこと、2つ目は食器の需要が急増の場合の、日本陶器の食器製造事業を補完する目的であった。1919年にはイギリス、アメリカへ輸出を開始、国内にも初出荷する。1921年には硬質陶器の生産が開始される。1960年代の後半には建築関連需要が急増したため、1970年に「東陶機器株式会社」に社名を変更するとともに、食器事業を停止した。

白い皿のMade in Occupied Japanの描かれたこの裏印は1946年の末から1951年に使用されたもので、おもに東南アジア向けに輸出されていた。

白い皿の重量を表2に示した。全部で13枚あり、重さは最も軽いものが267グラム、重いものが339グラム、平均すると296グラムである。白色の皿の特徴は、①無地のスープ皿 ②直径20センチ、高さ3.5センチ ③重さは平均296グラム ④東洋陶器製（1946年末から1951年）⑤硬質陶器 ⑥品質はよくないが、青い皿よりは上質である。

## 5 山口大学の変遷

次に山口大学について『山口大学三十年史』（山口大学30年史編集委員会、1982）に基づき家庭科関連の出来事を中心に説明する。

1949年（昭和24）5月31日、国立学校設置法に基づき、山口大学が発足する。山口青年師範学校と山口師範学校が山口大学に包括され、山口大学教育学部となる。これらの師範学校のあった場所の光と防府には、それぞれ光分校、防府分校が設置されるとともに、附属山口小学校、光小学校、山口中学校、光中学校が設置された。その後1951年には山口師範学校の課程が廃止され、1957年には光分校の廃止、1960年には防府分校が廃止された。1972年には、山口大学は統合移転し、山口市の中心地から現在の吉田地区に移転する。距離でみると、山口本校から20キロ離れた位置に防府分校、防府からさらに55キロ離れたことに光分校があった。

中学校家庭科教員の養成は、防府分校に職業科と家庭科があり、防府分校で行われていた。

一方、小学校課程に必要な家庭科の授業は光分校で行われていた。山口本校は、防府分校の教官が出張して行っていた。山口本校の前身が師範学校の男子部の校舎であったため、施設がないため講義が主であったという。

家庭科関連の出来事としては、1955年には教員養成80周年式典で1000万円の寄付が集められ、施設の充実に使われた。そのとき家庭科の備品も購入したと記録されている。1960年には、家庭科のあった防府分校が山口本校に統合された。1965年には、学部本館が改築され、家庭科も移転した。1972年には、山口市の中心地から少しはずれた現在の吉田キャンパスへ移動し、3度目の引っ越しを行う。2010年には、教育学部耐震補強のため改修され教室が移動した。

調理学実習を担当した教員は、この期間に3名である。S教員は1948年に山口青年師範学校に就職、翌年に山口大学の講師として採用、1981年に退職された。K教員は、1965年に山口大学に就職、1992年に退職された。筆者は、S教員の後任として1981年に就職し現在に至っている。

## 6 食器の保管と入手の経路について

これまで食器が廃棄されずに保管されていた理由を考えると、

- 1) 調理用具、食器類を大切にしていた。私が1981年に就職したとき、防府分校から持ってきた「家庭科」のタグのついた調理器具が残っていた。
- 2) 調理実習の担当者が少なかった。山口大学が発足してから3人であり、調理器具、食器などの移動が少なかったと言える。
- 3) 食器棚に余裕があった。最近まで使用していた食器棚は、壁面に作りつけで、端のほうにおいてあっても邪魔にならなかった。
- 4) これらの食器は、使用する機会が少なかった。青い食器は重すぎて使う気にならず、またランチプレートは使用する機会が限られていた。白いスープ皿は13枚だったため、クラスの人数的数が揃っていなかったこと、他の皿に比べて白さがくすんでいることから、実習のときに使用されにくかったと思われる。

次に、これらの食器の入手経路を考えてみる。まず、購入したのか、という点では、Made in Occupied Japanの食器は輸出用だけでなく、国内でも流通していることがわかった。食物学調理室にある食器には、東洋陶器製の食器が比較的多く、白い皿も購入された可能性があると考えられる。一方、青い皿については、裏印がなく、色や形態から、ノリタケでも東洋陶器でもニッコー（現在もウィローパターンの食器を生産している会社）でもないと考えられた。

購入でない場合は、誰かが持ち込んだ可能性がある。食器類や調理器具は、ときに調理室に寄付されることもある。退職されたS教員に、これらの食器に記憶がないか写真でお尋ねしたが、記憶にないとのことであった。同じ頃おられたM教員の後任の教員は、見たことがないということであった。食物学のK教員にお尋ねすることはできなかった（注）。

さて、防府分校のあった防府市にある航空自衛隊の沿革（自衛隊山口地方協力本部HP）をみると、1944年（昭和19）4月に日本陸軍防府飛行場として発足し、戦後は英豪連合軍の進駐の後返還され、1955年（昭和30）航空自衛隊操縦学校が新設され、その後1959年（昭和34）に航空自衛隊防府北基地になっている。このため、英豪連合軍の放出品の可能性も考えることができる。ウィローパターンがイギリス人に好まれる絵柄であることから英豪連合軍と関連があるのかもしれない。

今回の調査では、皿の入手経路を明らかにできなかった。

## 7 おわりに

山口大学教育学部の調理学実習室に保管されていたMade in Occupied Japanの2種類の食器について、その特徴、由来、保管された理由などについて検討した結果を報告した。

Made in Occupied Japanの食器は、全国のほかの大学でも使用されていたのであろうか、大学における調理学実習に使用されていたとすれば、調理実習の献立も興味深い。今後の課題として、学校教育の中の洋食献立の導入と食器との関連について調査したいと考えている。

本研究は、(社)日本家政学会食文化研究部会研究発表大会（2009年11月）にて発表した。

本研究を行うにあたり、食器の存在に気づいてくださった山口大学教育学部非常勤講師佐藤登先生に感謝します。また、TOTO歴史資料館、名古屋陶磁器会館、愛知県陶磁資料館にお世話になりました。お礼申し上げます。

## 注

K教員は、在職中、ウィローパターンのコーヒーカップや皿を使用されていた。これは、石川県白山市にあるニッコー株式会社の食器であり、ニッコー株式会社では「山水」という名前でウィローパターンが現在も販売されている。K教員が山口大学に赴任されたのが1965年（昭和40）であり、K教員が持ち込んだ可能性は低いと思われる。

## 引用文献

東田雅博 2008『柳模様の世界史』大修館書店

田村哲・宮田昌俊編集 2003『土と炎の世紀』愛知県陶磁資料館

山口大学30年史編集委員会 1982『山口大学三十年史』山口大学、pp.369-371